

MUSASHINO^{Vol.86} *for* TOMORROW

● 巻頭 ●

ナルシシズムからの脱却

● 海外音楽事情 ●

ハチャトゥリアンの薫陶を受けて

● 卒業生インタビュー ●

音楽を求めて旅に出る

July 2008
vol.86

ナルシシズムからの 脱却

加藤諦三●社会心理学者

現代は自己アイデンティティが持ちづらく、悩みの多い時代と言われます。加藤諦三先生は若者たちの心の問題を解く著作を多数出版され、社会心理学の泰斗です。本学で講演をいただいたこともあります。どう自分を信じて進んで行くか、原稿をいただきました。

元氣よく落ち着いて勉強するためには、どうしたらよいか？

自分の目的が出来れば人は落ち着く。心が落ち着かなければ勉強は出来ない。

人は自分の軸がないから落ち着かない。自分の軸とは、その人の生き方。

「落ち着いて」と言うことは、「自分と他人を比較しない」と言うこと。

目的が必要といっても、目的を間違っただけではいけない。

今、何となく元氣がないあなたは、いつから元氣を失ったのか？

小さい頃、好きな人がいたのではないか。しかしその好きな人が自分を十分にかまってくれなかった。

何をするのも億劫なあなたは、小さい頃、好きな人から期待したほど自分を認めてもらえなかった。その人は、あなたが一緒にいて欲しいときに一緒にいてくれなかった。

そうした絶望が心の底にあるのではないか。

自分の心の底の絶望に気が付くことは、自分を信じられるようになるためには、大切である。何時あなたは絶望したのか。何で絶望したのか。

「お母さん、こっちを向いて、私だけのお母さんになって」と心の底で叫んだときに、お母さんはあなたの方を向いてくれなかった。

何をしても楽しくないあなたは、そんな体験が積み重なったのではないか。

そして何時しかそう叫ぶことも止めてしまった。叫ぶことが無駄だと感じたから。その時にあなたは絶望したのではないか。

そんなあなたが明るく素直になれるはずがない。

なんで自分は元氣が出ないのか？

なんで自分を信じられないのか？

なんで自分はエネルギーに生きられないのか？

あなたはなぜ心を閉ざしたのか。それを自分で分析することである。

そしてそれを話せる友達を作ること。落ち着いて勉強するということは、心がスッキリしなければ無理。心の中のものをしゃべらなければ駄目。

しゃべってスッキリとしたときの心理状態、それがあなたの心の軸。

1



▲武蔵野音楽大学入間キャンパス

他者の中にある自己

「何をしていいかわからない」とか「何もする気にならない」という学生がいる。

たいていナルシストである。その人の話を聞いていってみると次のことが分かる。

その人の努力の方向が「他者の中にある自己のイメージアップ」に向いているということである。

要するに人が自分のことをどう思っているかが気になると言うことである。そして人からよく思ってもらうための努力しかなしいということである。

自分が幸せになろうとしているのではなく、幸せな人と思ってもらおうと努力している。

自分が優れた人間になろうとしているのではない。人から優れた人間と思われるための努力しかなしいということである。

もし何か困ったときに誰かが自分を必ず助けてくれると思えば、人が自分をどう思うかと言うことをそれほど気にはしない。

しかし自分が困ったとき、あるいは淋しいとき、またはどうして良いか分からないとき、必ず人が自分を助けてくれると思えない。そういう人が居ない。

そうなれば誰でも不安である。

「他者の中にある自己のイメージ」とは「他人が自分をどう思っているか」と言う事である。

現実の自分に対する関心ではなく、他人が自分をどう思っているかと言うことに関心が行っている。

「他人が評価しているところの自分」が「他者の中にある自己のイメ

ージ」である。

四方を鏡に囲まれた部屋にいるのだが、鏡に写った自分には関心がない。鏡には関心がない。

不安でなければ周囲に関心が行く。つまり「この人はどういう人だろう?」と言う他人に関心が行く。しかし不安だから自分のことしか考えられない。

「他人が自分をどう思っているか」と言ったところで、他人に関心があるわけではない。また他人が自分をどう思っているか分かっている訳でもない。勘違いも甚だしい。

自分が自分を理解する

他人に関心があって「他人が自分をどう思っているか」と思うときに初めて他人が自分をどう思っているか正しくわかる。

他人に関心がなくて「他人が自分をどう思っているか」と思うときに、他人が自分をどう思っているかについて間違っていることが殆どである。

良い人と思ってもらおうとして努力しても、たいていはそう思われて



加藤諦三 (Taizo Kato)

1938年東京生れ。63年東京大学教養学部教養学科卒業。68年同大学院社会学研究科修士課程修了。72年早稲田大学理工学部助教授、同大学文学部兼担助教授。73年ハーヴァード大学イエンチン研究所准研究員(～75年)。76年早稲田大学理工学部教務副主任、TVKテレビ「学歴社会を考える」シリーズの構成および総合司会でギャラクシー賞受賞。77年早稲田大学理工学部教授。84年早稲田大学理工学部教務主任。86年早稲田大学交響楽団会長、早稲田大学エクステンションセンター所長(～90年)。89・98年早稲田大学交響楽団世界演奏公演団長。90・92・94・96・98年東京都青少年問題協議会委員。02・04年東京都青少年問題協議会副会長。08年早稲田大学理工学部教授退任。現在、ハーヴァード大学ライシャウアー研究所准研究員、日本精神衛生学会理事、産業カウンセリング学会理事。著書に「心の休ませ方」「自分の受け入れ方」「やさしい人」「たくましい人」(いずれもPHP研究所刊)、その他多数。





▲ 本学附属高等学校生
入間キャンパス

がない」とか、とにかく自分を理解
することである。

自分の弱点を 知られたくない

私は二十六歳の時に「俺には俺
の生き方がある」と言う本を書いた。
そこで「人がどう思おうとかまわらない」
「人なんかどうでもいい」と書いた。

それにたいして「無責任、身勝手」
と言う批判が一部にあった。私は
正しく説明できなかったが、私が言
いたかったのは、今から思えば、
自分のなかのナルシズムの克服
である。

確かに今から思えば「人がどう
思おうとかまわらない」「人なんかど
うでもいい」と言えば、それは走っ
ている車から空きかんを捨てても、
お風呂に入らなくて臭くても、破れ
ている服を着ていても、「人がどう
思おうとかまわらない」と言う開き直
りの台詞と取られても仕方ない。

あるいは他人の迷惑になる様な
ことをしたってかまわれないと言
う様に取られても仕方ない。

* * *

「人にどう思われているか」を過
剰に気にする人は、自分の弱点を
人に見破られないかと気にしてい
るのである。

「人にどう思われているか」を過
剰に気にする人には、「こうは思わ

ナルシズムからの脱却

Taizo Kato

3

平成19年度 音楽学部卒業生による新人演奏会



五十川 聡(ヴァイオリン)

いない。せいぜい「利用しやすい
人」と思われているだけである。

現実には借金だらけなのだが、ス
ポーツカーに乗ってかっこいいと思
っているような若者である。周りは
彼を馬鹿な奴としか思っていない。

また自分は紳士的に振る舞って
いるつもりでも人は紳士的と思っ
てくれている訳ではない。

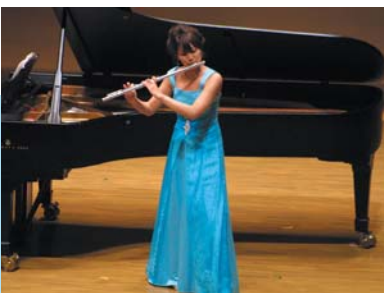
ナルシストは水に映った自分の
姿にしか関心がない。

朝から橋の上で川の水に映った
自分の姿に見とれている。そして何
十年も水に映った自分に見とれて
いて、自分の老いに気が付かない。

水に映った自分が癌ではないから、
自分は癌ではないと思っている
様なものである。

まず人が自分をどう思うかより
も、自分が自分をしっかりと理解す
ることである。

「私は自分を信じられない」とか
「私は人から嫌われるのが怖い」と
か「私には本当に信頼できる友達
がいない」とか「私には好きなもの



織建友里(フルート)



日浦真矩(テノール)



阿久澤政行(ピアノ)

れたくない」というものがある。

自分の弱点を知られていないかを気にする。その弱点が「他人にどう思われているか」を過剰に気にすることの大きな原因であろう。

自己憎悪から 自己実現へ

たとえば次のような矛盾を気にしない若者がいる。

自分は親にうそをついている。しかし親が自分を信用しないと怒る。嘘をつきつつ、「お母さんは僕を信用していない」と怒る。

子供は母親に「自分の子供を信頼できないのか!」と本気で怒る。

自分が嘘をついていなくて、そのうえで親の信頼がないなら怒っても分かる。しかし事実は逆である。

それは、子供は嘘をついているという感覚がないからである。子供は親に良い子と思ってもらうための嘘をついている。子供がついている嘘は親をだますための嘘ではない。親から認めてもらうための嘘である。

親に嘘をつく若者ほど親に激しく「自分の子供を信頼できないのか!」と怒る。

嘘をつく子供ほど親に「嘘をつかない子供」「信頼のおける子供」としてもらいたいのである。これがナルシズムである。

彼の関心は「現実の自分がどうで

あるか」ではない。彼の関心は相手が自分をどう思っているかである。

つまり「現実の自分」より「相手の思っている自分」のほうが大切なのである。

そして相手に自分を「こう」思わせたとしても、それが実体ではない。単なる虚像である。

だからそれが批判されると傷つき怒るのである。よく人は「本当のことを言われる」と怒るという。それは虚像を指摘されるからである。

そしてそういう人が現実の自分を憎む。それが心理的には様々な問題の原因となる自己憎悪である。

私は自己陶醉している人ほど自己憎悪になりやすいと思っている。

しかし、もし子供の「愛されるための嘘」に親が適切な反応をしていたら、子供は親も驚くほどの音楽家に成長していたかもしれない。

そこで親が対応を間違ったので、すねて斜に構えた学生になってしまったのかも知れない。

人が自分をどう思っているかを気にする人は、好きな人から本当に認められた体験がないのだろう。

自分の好きな人から本当に認められたら、その他の人からどう思われるかは気にならない。

他人の期待に応えることが人生になってしまった人は、淋しい人。

嘆くまい、悩むまい、他人をみることなく、まっすぐ前を見て歩く。

人に気を取られて、自己実現を忘れてはいけない。



▲ 江古田キャンパス



大竹 翠 (マリンバ)



中山 彰 (チューバ)



飯島正徳 (ピアノ)

海外音楽事情

ハチャトゥリアンの 薫陶を受けて①

コンスタンティン・シロウニアン教授(ピアノ)



コンスタンティン・
シロウニアン
(Konstantin Sirounian)

モスクワ音楽院にてピアノ・作曲の両博士号取得。作曲はハチャトゥリアンに師事し、彼の最後の教え子となる。その後モスクワ音楽院にて、ハチャトゥリアンを始めとする多くの教授のアシスタントとして作曲とピアノを指導する傍ら、コミタス音楽院においてピアノ科及び作曲科の教授を務める。全ソビエト作曲コンクールにて、ピアノ曲集「コントラスト」で第1位を受賞。1988年、アメリカ合衆国に移住。南カリフォルニア大学教授を務め、同時にアメリカとヨーロッパ各地にて演奏、指導の両面に活躍。Music International Connection主宰。国際音楽指導者連盟副会長。06年より武蔵野音楽大学客員教授。

旧ソ連の作曲家であり、バレエ組曲「ガイーヌ」のハイライト部分「剣の舞」が有名なアラム・ハチャトゥリアン。武蔵野音楽大学客員教授のシロウニアン先生は、モスクワ音楽院時代に、そのハチャトゥリアンから直接指導を受けられました。師との出会いや体験したユニークな指導方法、当時の音楽院の様子など興味深いお話を2回にわたってお届けします。

ハチャトゥリアン先生との 出会い

ハチャトゥリアン先生との出会いは、私が20歳前後の頃でした。そもそも私はモスクワ音楽院にピアノの生徒として在学していました。実は、作曲にも興味があり、10歳くらいの頃から勝手に曲を書いたりもしていたのですが、モスクワ音楽院では、まずはピアノに集中していました。が、そんなある日、音楽院の廊下で私が楽譜をパラパラと眺めていたところ、偶然先生がエレベーターから降りて来て、私に「すまん、遅くなった、さあ行こう」と言う

のです。彼は、私が彼の作曲の生徒であると勘違いしたのです。私はびっくりしましたが、そのまま成り行きで彼のレッスン室に連れて行かれてしまったのです。

行ってみてびっくりしました。人が何十人もいて、録音録画の機材まで並んでいたのです。レッスン室には外国人を含む作曲家、音楽家、あるいは教師たちがレッスンを受けたり聴講したりするために、常時、大勢集まっていました。ちなみに、こうした彼の晩年のレッスン風景を記録したドキュメンタリー映画もあるのですよ。たぶんモスクワ音楽院には残っているはずですよ。いつの日か、皆さんにもお目にかけてみたいものです。

ともあれ、この偶然の出会いをきっかけに、その後、私は正式に作曲科の試験も受けて、彼のもとで勉強するようになりました。レッスンはとてもユニークで、技術的な事を教えるというよりは、彼自身の作品や、音楽、オペラ、バレエなどについて語り、またその合間にレッスン室に何十人か集まっている生徒たちの中から誰かを指名して、「君の作品をしばらく聴いてない、何か弾いてみたまえ」といった調子で声をかけるのです。突然指名されるわけで

すし、ハイレベルの仲間や先生方が大勢聴いているのですから、弾く側は緊張しますよ。こうした独特のレッスンに初めて触れた私は、自分も教わりたいという気になり、ちょうど当時書きかけていたチェロとフルートの組曲を、翌週までにどうにか形にして持っていったのです。

ハチャトゥリアン先生の指導方法

彼自身はとても伝統的な作曲家でしたが、彼のクラスにはさまざまな学生がいました。いわゆる現代音楽に夢中になっている連中も多く、たとえば「ベリオ風」「ヒナステラ風」「クセナキス風」などという具合に、特定の現代作曲家の語法を真似ようと躍起になっていました。ハチャトゥリアンはそれらに対して「正しくない」という言い方はしませんでした。時には、やたら叫び声やら囁き声や騒音が混じっているような作品を持ってくる生徒もいましたが、彼はそれすら理解しようと努め、「私には君の音楽がよく分らないが、ここをもう少ししたら…」といったアドバイスを与えていました。

また彼は、生徒一人ひとりに生まれつき備わっている音楽性を引き出すということを重要視していたように思います。生徒たちの中には、グルジア人、ポーランド人、キューバ人、あるいは日本人などさまざまなイントネーションを持つ者がいましたが、それぞれが持って生まれた民俗的な本質を作曲の中に活かすように指導していました。日本人の作曲家の作品も聴いたことがあります。私自身、日本の伝統音階などをとても興味深く聴きました。

作曲の指導というのは、ピアノの



指導のように、ある程度決まった形、あるいは正しいとか正しくないといった基準がないので、とても難しいのです。

作曲に当たっては、まず、作曲している本人の個性を理解し、それぞれの個性や見方を活かす方向に導かねばなりません。一人ひとりの個性というのは実にさまざまで、それぞれの個性を100%発露させなくてはならないのです。「正しい」とか「間違っている」という基準はあり得ません。ですから、どんなに訳の分らない、騒音にしか聞こえないような作品であっても、彼はそれに対して「良くない」ということは決して言わず、その作品の手法(ドラマツルギー)や、どのように展開させるべきかという方向性について語ってくれました。自らは伝統的な作曲家でありながら、どのような作品に対しても有益なアドバイスをしてくれることは、驚きでした。大変すぐれた作曲家であると同時に、すぐれた指導者でした。

作曲のうち旋律的アイデアは5%に過ぎない

生徒が何か作品を持っていくと、彼は、譜面に書き下ろされた音楽よりも、それぞれの生徒がそこに至

表紙の顔



北原 幸男さん

東京都出身。本学で指揮やオーケストラなどの指導に当たっている北原教授。桐朋音楽大学卒業後、N響指揮研究員を経てウィーンに留学、C.ブジャース、H.シュタイン、秋山和慶、小澤征爾の各氏に師事しました。

1985年ブラハの春国際コンクール第3位入賞。オーストリア・インスブルック州立歌劇場専属指揮者を経て、ドイツ・アーヘン市立歌劇場及び同管弦楽団音楽総監督を歴任し、ハーノーファー、キール、ブラハ等のオペラハウス、リンツ・ブルックナー管、バスク国立管、プカレスト・フィル、プラハ放送響、北イスラエル響等、世界各地の主要オーケストラに客演しています。国内ではN響、読響、東響をはじめ、各地の主要オーケストラに招かれるとともに、新国立劇場、二期会等のオペラ公演を指揮し好評を博しました。グローバル音楽奨励賞受賞。武蔵野音楽大学教授。

【今後の音楽活動】

- 8月10日 びわ湖ホール「カルメン」
- CD：都響『ショスタコーヴィチ・交響曲第5番 他』
- 日フィル『ブラームス・交響曲第1番 他』
- 大阪市音楽団「ブラバン R35」



▲ハチャトゥリアン(左)と
若き日のシロウニアン先生

るまでのプロセスに興味を示しました。各生徒がどうしてそう書くに至ったか、作者がどのように思考し、アイデアを展開させたかという過程を重要視して、次に彼らが進むべきステップを見極めようとしていました。また、彼はわれわれ生徒に、朝6時から仕事(作曲)を始めるように、と言いました。作曲という仕事のうち、もとな

る旋律的アイデアは5%にすぎない、あとの95%は、そのアイデアを展開させ、構築していくことであり、そのためには1日8時間くらい労作しなくてはならないとも言っていました。

生徒たちが彼のレッスンから学んだのは、どのように書くかということに留まりませんでした。共産主義時代はどの音楽家にとっても受難の時代であり、すべての音楽家がいわれのない非難を受け、いわゆる現代音楽とは程遠い伝統的な作曲をしていたハチャトゥリアンでさえ「モダン」だと指摘されました。そんな困難な時代にあっても、彼はひたすら自分の作曲を続け、指導を続けました。そうした彼のプロフェッショナルな姿勢には、大変感銘を受けました。(次号に続く・訳：重松万里子)

音楽の万華鏡⑤

音楽は文化の架け橋

前回(83号)のコラムで、異文化の音楽を理解することはなかなか難しいのだということを書かせていただきました。しかし、異文化同士が出会う場面では、音楽や舞踊が重要な働きをしているということも事実です。それは、さまざまな「国際親善」の場が音楽や舞踊で彩られていることから明らかです。異文化への興味は、だれでもが持っている普遍的な興味であり、音楽は異文化を理解しようとするときに、もっとも親しみやすい入り口のひとつといってもよいのではないのでしょうか。

古代日本、畿内を根拠地とした一



▲伶人舞 下巻八 「東遊」

豪族が、各地の豪族を征服し日本最初の統一政権である大和朝廷を作り上げます。大和朝廷由来とされる音楽が、今日も「国風歌舞」などと呼ばれて雅楽の楽人(演奏家)によって伝えられています。その1種目に「東遊び」というグループがあります。東国の豪族が、服属の証しとして、大和朝廷に自国の歌や舞を献上したものだともいわれています。異文化であった東国を中央の朝廷に理解してもらうには、恰好の手段だったのでしょうし、めずらしい異国の歌舞は、大和朝廷の人々の耳や目を楽しませたことでしょう。

子どもの頃、親に連れられてウィーン少年合唱団の公演を聴きに行ったことがあります。自分といくつも年齢の違わない少年たちの美しい歌声に、すっかり魅せられてしまいました。アンコールだったのでしょいか、日本の歌として「さくら」を少年たちは歌いました。子音の強さや母音の響きが微妙に私たちの日本語と違う「ガイジンの日本語」でしたが、日本の歌を歌ったウィーン少年合唱団は、より身近な、親しい存在に感じられ嬉しかったことを覚えています。これも音楽を通じた異文化理解の例の一つといえるでしょう。

薦田治子

卒業生インタビュー

宮森庸輔さん (コンサートフォトグラファー)

音楽を求めて旅に出る

イスラムの朗唱「アザーン」をご存知だろうか。1日5回、モスクから流れる祈りの時間を告げる呼びかけだ。音楽なのか音楽でないのか。この「アザーン」に引き寄せられて旅に出、卒業論文にまでしてしまった宮森さん。旅と音楽の心を伺った。



旅の始まりはギターだった

最初の旅はニューヨーク。高校を中退した頃、クラシックかジャズのギタリストを志して、どちらかの道を決断するための旅。本場のジャズに浸りながら現地で3ヵ月間、生活をしていた。帰国後、クラシックギターの道を選び没頭するも、練習のし過ぎで指を故障。その後、友人のオランダ人写真家を訪ねてオランダからスペインへの旅。写真と出会い、写真大学へ入学するがそこも中退。

指の故障で遠ざけていた音楽を、もう一度学びたいと猛勉強。念願かなって武蔵野音楽大学音楽学部音楽学学科へ。

毎日のように入間キャンパスの図書館にこもって、音楽の本を読みふけり、古代から現代まであらゆるジャンルの音楽を手当たり次第に聴きまくった。しかし、耳を通過する音楽は、なにか現実感と離れていた。目の前にあらゆる音楽や文献があるのに、自分が求める音楽を見つけられない。地団駄を踏む思いが続いた。大学2年の春休み前、まだ聴いたことのない音楽があるはず、知らない音楽を見つけにこうと思い、インド行きチケットを迷わず買った。

旅で出会った音楽



宮森庸輔

(Yousuke Miyamori)

1979年東京都出身。02年東京工芸大学芸術学部写真学科中退。08年武蔵野音楽大学音楽学部音楽学学科卒業。

● website
<http://ff.clanonline.com/yom/>

8



▲イェメン アルグルールを吹く人



▲インド ナッカラを叩く人



▲インド チムタを操る人



▲シリア アザーンを朗唱する人々



▲キルギス ロシアン・アコーディオン「バヤン」を弾く人



▲ウズベキスタン ドーイラを叩く人



イエメン どこかの村



▲インド 道を行く牛



▲ウズベキスタン サマルカンドの男たち

旅の風景

9



▼インド ジャイサルメールの男

旅で出会った人



▲シリア ウマイヤ・モスク

インドへ、体が音楽を感じる

4度目となる旅はインドへの旅。インドは、異世界だった。鳴り止むことのないクラクションの音、欲望むき出しの商人、汗と香辛料と牛糞の匂いが混じった生ぬるい空気、目の前で焼かれる死体。気がつくと、その場に近寄りシャッターを切る自分がいた。

道端のパフォーマーにレンズを向けている時、「彼の息づかいや身のこなし、聴き入る人々、通過するエンジン音、そんな音楽をとりまく風景も含めて、自分はいま、彼の音楽を音楽として体感している」と感じられた。東京の使い慣れた机の上で感じていた音楽に対するコンプレックスが、そこでは全くなかった。これが自分の求めていたものかも知れない。

私の旅の鉄則は、計画を立てない、宿の予約をしない、観光スポットにはあまり近づかない、人々の生活にふれる。1食10円か20円、飛行機代を含めても、日本に居る時よ



▲ウズベキスタン すいかと子供

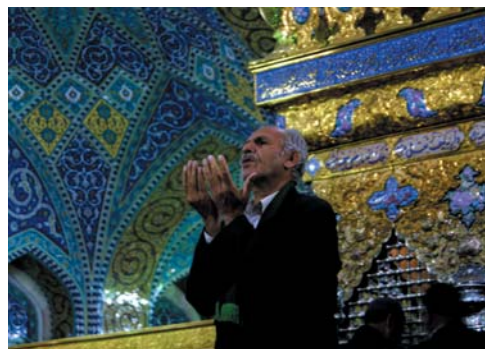
り安上がりなくらい。休みになると旅に出る学生時代だった。知らない世界に足を踏み入れ、自分の小さな世界に広がりや衝撃を与えることで、自分自身と向き合えた。

「アザーン」との出会い

インドを訪れた後にも何回かの旅があり、7度目の旅はウズベキスタン、カザフスタン、キルギスへの旅。自分の写真集にまとめたイスラム圏の旅だった。

そして8度目は、大学3年の秋から卒業するまでの3度にわたるシリアへの旅。自分の日常と懸け離れた世界を見たかったこと、さらに卒業論文のテーマとなる、イスラム教の礼拝時刻の到来を告げる「アザーン」の唱え手を探す旅だった。

実際に唱えられる「アザーン」を聴いた時、飛び上がるほど嬉しかった。しかもそこは、世界最古のモスクと呼ばれるシリア・ダマスカス



▲シリア 祈りを告げるシーア派の男



イエメン 銃とジャンビアーを携える男

のウマイヤ・モスク。朝3時半に起きて20分かけて日の出前のモスクへ、次に昼、15時前後、夕方、日没後と日に5回、「アザーン」の朗唱や礼拝風景を収録し、インタビューをする日々だった。

「アザーン」はイスラム教徒にとって、音楽ではなく宗教行為とされている。そのためか「アザーン」に関する音楽的文献はほとんどなく、唱え手の存在さえ日本では分からなかった。

未完の卒業論文

ウマイヤ・モスクで朗唱される「アザーン」は、各曜日によってアラブ音楽の旋法マカームが使い分けられたり、1日5回の礼拝時間帯の違いによって、「アザーン」の旋律型が変化したりする。また「アザーン」朗唱の前後には、ウマイヤ・モスク特有の旋律的朗唱が付け加えられるといった習慣も、徐々に明らかになっていった。

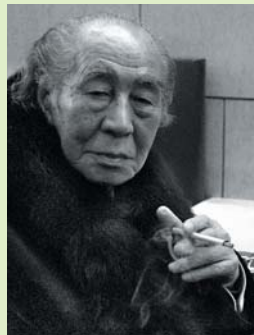
卒業論文のテーマは「アザーン」だったが、いつの間にか、その周辺にあるもの、つまりモスクで行われる礼拝儀式全体の流れに着目している自分がいた。東京にいる間は、在日のシリア人、ヨルダン人、またイスラム教やアラビア語に詳しい人から協力を得て、卒業論文をまとめていく作業をしていた。彼らと知り合うことができたのも、旅で身に付いたフットワークの軽さが役立っている。

卒業論文は一応の完成をみて、武蔵野を卒業できた。しかし、その後も不備な部分や間違いを見つけ、シリアへ飛んで現地で確認、修正したりしている。

旅は自分を育ててくれる。旅も、そして卒業論文も、本当の意味ではまだまだ終わらない。(この原稿はインタビュー(5月12日)と、宮森さんの文章からまとめたもので、文責は編集部にあります。また掲載した写真は、宮森さんの撮影によるものです。)

コンサートフォトグラファーとして

宮森さんは現在コンサートフォトグラファーとして活躍。この2枚の写真はその作品です。



▲伊福部 昭氏



▲深海さとみ氏

音楽余話

モーツァルトはある日、妻コンスタンツァに「庭を散歩して来るよ」と言って出かけた。一時間後、嬉しそうに戻ってきた彼は「今、新しい交響曲ができた。頭の中ではすっかり出来上がっていて、僕には曲全体が、まるで手のひらの上のりんご一つを丸ごと眺めるみたいに感じられる。これから、楽譜に書き下ろさなくてはならない」と、記譜に取り掛かった。譜面を書きながら彼は、コンスタンツァに「きのう君が訪ねた家で、面白い話題でもあったかい？」と話しかけ、彼女の話聞いて無邪気に

好対照(モーツァルトとベートーヴェン)

笑いながら、会話を続けた。この間、彼の手は、すらすらと楽譜を書き続けていたという。

一方、ベートーヴェンの手稿はたいてい、書き直しや削除の形跡、またインクの染みなどが実に多く、彼の労作ぶりを物語る証拠となっている。彼が作曲している時、体温は上昇したと伝えられる。工作中、困難にぶつかり、暑くてたまらなくなると、服を脱ぐだけでは済まずに、傍らのバケツに用意していた冷水を頭から被っていた。階下の住民が、ベートーヴェンの部屋からの水漏れに音を上げ、役所に宛てて書いた訴

状が、この事実を示している。彼がしばしば引越しをしたのも、その結果であった。

モーツァルトは、常に子供のよう純粋でナイーブであり、彼がひたすら誠実に追い求めた調和と美は、人々にとってかけがえのない遺産となった。一方、ベートーヴェンは、闘争と苦悩に満ちた人生と創作活動を通じて、カオスから歓びと真実を導き出し、人々に与えたのである。

コンスタンティン・ガネフ
(訳: 重松万里子)

楽しくにぎやかに、学園春の行事



▲大学 新入生歓迎会

▼附属高等学校 体育祭



穏やかな春風に導かれ、桜が美しく咲き誇る4月初旬、大学、附属高等学校、各幼稚園では、入学式、入園式がとり行われました。

オルガンや金管楽器のファンファーレによる壮大な祝福の響きに包まれ、憧れの大学生活を迎えて晴れやかな様子の大学新入生。真新しい制服姿が初々しい高校新1年生や元氣いっぱいの新入園児たち。それぞれ、新たな環境での生活に、緊張の中にも喜びに溢れているようでした。多くの新入生たちが集い幕を開けた新学期、同時に春の学園行事も順調に進んでいます。

まず大学では、恒例の新入生歓迎会が開かれました。先生を交えてのクラス毎の交流会、セレモニーやパーティーと続き、歓迎演奏会では、卒業生や先輩たちの素晴らしい演奏に、新入生は大いに刺激を受け、これからの勉学への指針を得たようです。

高校では、キャンパス内のグラウンドで体育祭が開

催されました。1年生が息の合ったチームワークで、大縄跳び100回記録を達成。綱引きでは、2年生が学年を越えて勝利を手にするなど、若さ溢れるパワーを発揮しました。さらに2年生は、5月28日より4日間広島、京都、大阪方面に修学旅行に行ってきました。陶芸絵付、能楽、長唄三味線などにチャレンジし、奥深い伝統芸能に触れる一方、ユニバーサル・スタジオで一日を過ごしました。1、3年生は飯能のキャンプ場で手料理を楽しみ、一人ひとり青春の1ページを刻みました。

今年から3年保育を開始した3つの幼稚園では、公園や遊園地に出かけ、暖かな日差しをいっぱい浴びながら春の遠足を楽しみました。年少・年中組は親子遠足となり、愛情たっぷりのお弁当はとても美味しくでした。



▲幼稚園 春の遠足

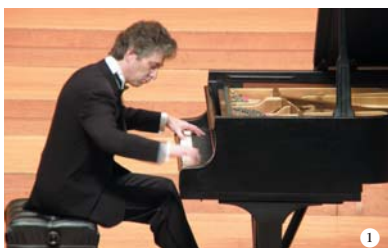


▲附属高等学校 修学旅行

多彩な春期公開講座シリーズ&演奏会

平成20年度の公開講座シリーズが開幕し、各ホールにおいて多彩な内容のリサイタル、講座が繰り広げられました。

本学バートーヴェンホールでは、5月13日、本学客員教授のセルゲイ・エーデルマン教授のピアノ・リサイタル



「」が開催されました。先生の熟考されたJ.S.バッハのパーティータ第6番は、心に染み入る演奏で聴衆を魅了しました。6月2日には、本学のクルト・グントナー(ヴァイオリン)、クレメンズ・ドル(チェロ)、ドル・恵理子(ピアノ)三氏によるトリオ演奏会」。

バートーヴェンプログラムを息の合った演奏で格調高く披露しました。続く6月13日には、日本を代表する実力派チェリスト向山佳絵子女史(本学講師)チェロ・リサイタル」が開催されました。ソロのみならず、室内楽等でも活躍している、経験豊かな洗練された音色を響かせました。また6月4日には、ケマル・ゲキチ本学客員教授による



ピアノ公開レッスン」が〜ショパンとリストの作品を題材として〜のテーマで開催されました。

入間キャンパスバウハザールでは、5月22日、ショパン音楽院を首席で卒業したポーランドの若き演奏家、ミハウ・ソブコヴィアク ピアノ・リサイタル」が開催され、ショパン、シマノフスキ、パデルフスキの作品を叙情たっぷりに熱演しました。

江古田キャンパスモーツァルトホールでは、4月26日、超絶技巧を誇るソロのチューバ奏者として著名な、オイスティン・パーズヴィック氏によるチューバ・クリニック&ミニ・コンサート」。

同キャンパス90室では、4月19日、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団等多数のオーケストラで活躍する、トロンボーン奏者のディートマル・キューベルベック氏によるトロンボーン・クリニック&ミニ・コンサート」が開催され、いずれの講座も熱心な受講生で溢れ、実りあるものとなりました。

また、平成19年度本学大学卒業生、大学院修士課程修了生による新人演奏会が、津田ホールでそれぞれ開催され、その輝かしい前途に温かい拍手が送られました。さらには、“ニューストリームコンサート”として、ヴィルトゥオーソ学科の学生による演奏会が、バルナソス多摩シューベルトホール、入間キャンパスバウハザールで開催され、演奏家をめざしている学生達は、日々の研鑽の成果を力強く響かせました。



栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)

(前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●齋藤 菜緒 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学)
 ●高橋 奈津子 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学)
 第8回 アルベルト・ルーセル国際ピアノコンクール (ブルガリア)
 ピアノデュオ部門 第1位入賞

●井上 茜 (平成18年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学)
 第8回 アルベルト・ルーセル国際ピアノコンクール (ブルガリア)
 ソロ部門 第3位入賞

●石本 尋美 (平成19年大学卒ヴァイオリン専攻)
 アラム・ハチャトゥリアン国際コンクール2008 第3位入賞 (1位なし)

●小原本 ひとみ (平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)
 第1回 日本・ブルガリア国際コンクール (ブルガリア)
 カテゴリB 第3位入賞 (1位なし)、ブルガリア音楽賞受賞

●黒黒 久美子 (昭和46年大学卒ピアノ専攻)
 平成19年度 第29回 木内音楽賞受賞 (秋田県)

●大西 宇宙 (平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学)
 第39回 イタリア声楽コンクール ミラノ部門 金賞、バリトン特賞受賞

●所 花名 (平成20年大学卒チェロ専攻 本大学院修士課程1年次在学) 練馬文化センター第23回新人演奏会出演者オーディション 弦楽器部門 優秀賞受賞

●齊木 睦 (大学2年次在学ピアノ専攻) 第19回 リ・スプレンドル音楽コンクール ピアノ部門 第2位入賞 (1位なし)、第1回 エレーナ・リヒテル国際ピアノコンクール 大学・一般部門 第2位入賞 ●竹中 千絵 (大学3年次在学ピアノ専攻) 第10回 “万里の長城杯” 国際音楽コンクール ピアノ部門 一般Aの部 第2位入賞 (大学2年次に入賞)、第3回 東京芸術センター記念ピアノコンクール 入選 ●金子 淳 (大学4年次在学ピアノ専攻) 第1回 日本グランドソリストコンクール ピアノ部門 第2位入賞 (大学3年次に入賞)、第3回 東京芸術センター記念ピアノコンクール 入選 ●橋 夏希 (大学3年次在学トロンボーン専攻) 第10回 “万里の長城杯” 国際音楽コンクール 管楽器部門 大学部 第6位入賞 ●中島 有紀 (大学3年次在学打楽器専攻) ●中原 裕章 (大学3年次在学打楽器専攻) TIAA 第37回 全日本クラシック音楽コンサート 優秀賞受賞 ●勝山 結実 (大学3年次在学クラリネット専攻) ●佐々木 純子 (大学3年次在学クラリネット専攻) ●本田 佳奈 (大学3年次在学クラリネット専攻) ●山西 彩子 (大学3年次在学クラリネット専攻) 第5回 クラリネットアンサンブルコンクール 一般B部門 第3位入賞 ●小林 未佳 (大学3年次在学ピアノ専攻 本高等学校卒) 第14回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 大学生の部 ピアノ部門 第4位入賞 (2位、3位なし) ●野尻 小矢佳 (平成19年大学卒ピアノ専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 打楽器部門 一般の部 第5位入賞 (1位、2位、3位なし) ●黒川 春香 (平成19年大学卒ピアノ専攻) 第10回 “万里の長城杯” 国際音楽コンクール ピアノ部門 一般Aの部 優秀賞受賞 ●松浦 るみ子 (平成5年大学卒ピアノ専攻) 第2回 東京サミット音楽コンクール 一般の部 審査員賞受賞、第12回 全日本演奏家協会新人オーディション 合格、ニューイヤークンサート出演 ●佐々木 あや (平成19年大学卒ヴァイオリン専攻) ●関根 かおり (平成19年大学卒チェロ専攻) ●成田 幸 (平成19年大学卒ヴァイオリン専攻 本高等学校卒 本特修科在籍) ●堀口 洋子 (平成19年大学卒ヴァイオリン専攻 本大学院修士課程2年次在学) 第18回 ANP全日本ソリスト・コンクール 審査員賞受賞 ●矢島 あかね (大学3年次在学ピアノ専攻) 第3回 東京芸術センター記念ピアノコンクール 入選、第18回 ANP全日本ソリスト・コンクール 審査員賞受賞 ●山田 善裕 (平成15年大学卒トロンボーン専攻) 第14回 おきでんシュガーホール新人演奏会オーディション 入選 ●安齋 周 (平成17年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了) 第2回 野島松よこすかピアノコンクール 入選 ●池田 祥子 (大学3年次在学ピアノ専攻 本高等学校卒) 第11回 バトロフピアノコンクール 大学生・一般部門 入選 ●鈴木 雅之 (大学3年次在学ピアノ専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 全国大会 ピアノ部門 大学の部 入選 ●水上 早苗 (大学1年次在学オーボエ専攻) 第17回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会ピアノ部門 一般の部 好演賞受賞 ●横山 美雪 (平成7年大学卒ピアノ専攻) 第39回 国際芸術連盟新人オーディション ピアノ部門 合格、奨励賞受賞、第22回 コンセール・ヴィヴァン新人オーディション 合格 ●船橋 登美子 (平成5年大学卒ピアノ専攻) 第13回 伴奏ピアニストオーディション オペラ部門 合格 ●小島 加奈子 (大学2年次在学ピアノ専攻) 2008年度 家永ピアノ・オーディション 合格 ●大和久 知里 (大学3年次在学ピアノ専攻) 平成20年度春期海外音楽大学マスタークラス派遣助成オーディション準合格、ロシア国立モスクワ音楽院マスタークラス受講 ●田村 萌夏 (附属江古田音楽教室在室 江東区立深川第三中学校1年生) 第1回 日本・ブルガリア国際音楽コンクール (ブルガリア) ピアノ部門 19才以下の部 ブルガリア音楽賞受賞 ●大谷 舞 (附属入間音楽教室在室 入間市立藤沢北小学校2年生) 第14回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 小学生の部 弦楽器部門 第1位入賞 ●江黒 麗乃 (附属江古田音楽教室在室 練馬区立大泉学園緑小学校6年生) 第5回 「若い芽のコンサート」出演者オーディション ピアノ小学生部門 最優秀賞受賞 ●志村 直樹 (附属江古田音楽教室在室 千代田区立九段小学校6年生) 第7回 アールンピアノコンクール C級 第3位入賞 ●田中 舞 (附属江古田音楽教室在室 東京学芸大学附属大泉中学校3年生) 第11回 バトロフピアノコンクール 中学生部門 奨励賞受賞 ●ミュージックセラピー研究部 平成20年度春季善行表彰受賞

練馬文化センター第23回新人演奏会出演者オーディション 声楽部門 最優秀賞受賞

●飯野 未奈美 (平成20年大学卒打楽器専攻 本特修科在籍)
 第24回 打楽器新人演奏会 打楽器部門 第1位入賞

●二枝 由衣 (大学1年次在学声楽専攻)
 第10回 九州音楽コンクール 声楽部門 大学生クラス 最優秀賞、金賞受賞

●丸山 則子 (平成8年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了)
 第20回 大仙市大曲新人音楽祭コンクール 声楽部門 優秀賞 (声楽部門 第1位) 受賞

●白須 朋子 (平成8年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了 本大学院博士後期課程3年次在学)

第3回 ベルカント・ソプラノ・コンコロソ 第1位入賞、観客賞受賞

●鹿野 恵 (平成元年大学卒声楽専攻)

第19回 奏楽堂日本歌曲コンクール 歌唱部門 第2位入賞

●杉山 知勢子 (昭和40年大学卒声楽専攻)

第19回 奏楽堂日本歌曲コンクール 歌唱部門 奥田良三賞受賞

平成21年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学1年次、武蔵野音楽大学附属高等学校の平成21年度入学試験要項は、7月上旬に発行予定です。

希望者には無料で配付しますが、郵送ご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および大学、高校の別を明記して送料の実費分 (大学390円・高校240円) の郵便切手を同封して

下記、広報企画室宛にご請求ください。なお、夏期受験講習会受講の方には、講習期間中に配付します。

●お問い合わせ・請求先
 武蔵野音楽学園 広報企画室
 〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125

平成20年度同窓会総会のお知らせ

平成20年度武蔵野音楽大学同窓会全国総会は、来る8月5日 | 午後6時より、東京・目白「椿山荘」にて開催いたします。万障お繰り合わせ、お誘い合わせの上ぜひご来会ください。

平成20年度10月1日までの演奏会・公開講座のお知らせ

演奏会・公開講座

ニュー・ストリーム・コンサートⅦ～武蔵野音楽大学チェンバーオーケストラ～

指揮：クルト・グントナー	7月1日	18:30	ベートーヴェンホール(江古田)	¥1,000<全席自由>
曲目：モーツァルト ディヴェルティメント 第11番 二長調 K.251 他				
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会	7月14日	18:30	サラマンカホール(岐阜県県民ふれあい会館)	¥1,500<全席自由>
指揮：レイ・E.クレマー	7月15日	18:30	三重県総合文化センター 大ホール	¥1,500<全席自由>
ピアノ独奏：水野ゆみ(本学講師)	7月16日	18:30	東京オペラシティ コンサートホール	A席¥2,000/ B席¥1,500<全席指定>
曲目：2008年度全日本吹奏楽コンクール課題曲 他				

武蔵野音楽大学インターナショナル・サマースクール・イン・トウキョウ 世界の名教授たちによるスペシャル・コンサート

U.ヘルシャー(Vn.)& A.v.アルニム(Pf.) デュオ・リサイタル				
曲目：ベートーヴェン ヴァイオリン・ソナタ 第7番 ハ短調 Op.30-2 他	7月22日	18:00	ベートーヴェンホール(江古田)	¥3,000<全席自由>
S.シェリエ&F.レングリ フルート・デュオ・リサイタル	7月23日	18:00	ベートーヴェンホール(江古田)	¥3,000<全席自由>
ピアノ音楽セミナー 講師：E.クズネツォフ	7月25日	18:00	モーツァルトホール(江古田)	¥1,000<全席自由>
テーマ：ピアノ協奏曲について				
声楽指導法講座 松本美和子公開レッスン	7月27日	18:00	モーツァルトホール(江古田)	¥1,000<全席自由>
武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会	9月9日	18:30	バツハザール(入間)	¥2,000<指定席>
指揮：カールマン・ベルケシュ	9月10日	19:00	東京オペラシティ コンサートホール	¥2,000<全席指定>
ピアノ独奏：清水 綾(大学3年)<9/9>	9月12日	18:30	岡山シンフォニーホール	一般¥2,000/小中高 ¥1,500<全席自由>
金子 淳(大学4年)<9/10,9/12,9/15>				
曲目：シューマン ピアノ協奏曲 イ短調 Op. 54	9月15日	14:00	広島国際会議場フェニックスホール	一般¥2,000/小中高 ¥1,500<全席自由>
ストラヴィンスキー 組曲「火の鳥」(1919年版) 他				

武蔵野音楽大学附属高等学校音楽科 在校生と新卒業生によるコンサート

	10月1日	18:30	王子ホール	¥2,000<全席自由>
--	-------	-------	-------	--------------

お問い合わせ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120 ●武蔵野音楽大学入間キャンパス演奏部 TEL.04-2932-3108
※チケットは武蔵野音楽大学ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> でも予約ができます。

平成20年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 夏期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
高校生のための 音楽大学受験講習会	第1期 7月28日～7月31日	7月3日～7月11日(消印)	入間 キャンパス
	第2期 8月2日～8月5日	7月3日～7月16日(消印)	
中学生のための 高校音楽科受験講習会	7月28日～7月30日	7月2日～7月10日(消印)	江古田 キャンパス
免許法認定講習	7月25日～8月5日	7月3日～7月14日(消印)	
社会人のための 夏期研修講座※	7月30日～8月1日	7月3日～7月18日(消印)	

※社会人のための夏期研修講座は、下記のⅠ・Ⅱより各1講座、Ⅲより2講座を選択します。

- 中学生・高校生のためのピアノ指導法 ●声楽指導法(ドイツ語歌唱、日本のオペラ、ベルカント) ●編曲法の実際(愛唱歌をアンサンブルに編曲するための基礎知識) ●音楽科指導の実際(中学校教員を中心とした、教育基本法や新学習指導要領の理解と年間指導計画の立案)
- 小学生のためのピアノ指導法 ●器楽合奏(打楽器アンサンブルの楽しさ) ●ソルフェージュ(初心者を対象とした指導法) ●教材研究(ピアノ)
- 合唱指導 ●講話(歌舞伎と文楽) ●カール・オルフの音楽教育 ●個人レッスン(ピアノ、フルート、リコーダー、声楽のうちから1種類を選択) ●パイプオルガンのたのしみ「不思議な、ふしぎなバツハの曲」 ●音楽療法入門 ●楽器学入門(ピアノの歴史)

※上記の他に開催される演奏会は、受講者全員を対象としています。

- ◎実施日程、開催場所が昨年と変更になっている講習会があります。詳細は要項でご確認ください。
 - ◎講習会要項の請求は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL.03-3992-1125)またはホームページにてお申し込みください。(要項は無料、郵送料は学園が負担します)
- ホームページ：<http://www.musashino-music.ac.jp/>

●編集後記●

巻頭を飾っていただいた加藤諦三先生は、青春を導く心理学者として有名な方。「生きる」ことの参考にしていただければ幸いです。

シロウニアン先生の「ハチャツクリアンの薫陶を受けて」、卒業生インタビューの「音楽を求めて旅に出る」。今号は様々なジャンルの記事が揃いました(編)。



武蔵野音楽大学楽器博物館だより

カハリア インド 全長101cm

インド西部グジャラート州ダンクス県の小さな町ア
ーワ(Ahwa)は、毎年春になるとダンクス・ダーバー
という祭りで賑わう。この地方は森林に囲まれた標
高約2000メートルの丘陵地帯で、幾つかの地元部族
が居住している。これらの部族が一堂に集まって繰
り上げられる民族色豊かな踊りの祭典が、ダンク
ス・ダーバーである。カハリアはこの祭りで踊りの伴
奏のために演奏される。

この笛は細長く大きなヒョウタンと二本の竹で作ら
れており、奏者は楽器を紐で首に固定し、ヒョウタン
の上部に付けられた吹き口から息を吹き込む。息は
ヒョウタンからリードの付けられた竹筒に伝わり、ド
ローンを伴った旋律を奏でる。この楽器の演奏は村の
青年の長が務め、華やかに着飾った若い男女が奏者
らを囲んで輪になって踊る。

カハリアでひととき目を引くのが、楽器に付けられ
た数十本の孔雀の羽である。インドでは、古くから孔
雀は毒蛇を食するといわれ、毒を制する聖なる動物
と崇められてきた。この信仰は密教に伝わり、孔雀の
背に乗り柔和な表情の孔雀明王は、わが国でも奈良
時代からすでに祀られていた。孔雀明王が四本の手
のひとつに孔雀の羽を持っているのは、息災を祈る
ためである。カハリアは聖なる孔雀の羽とともに、
部族の宝である若者を守り、祝福し続けている。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

●目次●

- ナルシズムからの脱却 ①
加藤諦三
- 海外音楽事情 ⑤
ハチャトゥリアンの薫陶を受けて
コンスタンティン・シロウニアン
- 音楽の万華鏡 ⑦
音楽は文化の架け橋
- 卒業生インタビュー ⑧
音楽を求めて旅に出る
宮森庸輔
- 音楽余話 ⑩
好対照(モーツァルトとベートーヴェン)
- MUSASHINO NEWS ⑪
 - 楽しくにぎやかに、学園春の行事
 - 多彩な春期公開講座シリーズ&演奏会
 - 栄冠おめでとう!(コンクール入賞者等)
 - 平成21年度入学試験要項請求について
 - 平成20年度同窓会総会のお知らせ
 - 平成20年度10月1日までの演奏会・公開講座のお知らせ
 - 平成20年度夏期講習会のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発行

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2008年7月1日発行 通巻第86号